

ようか。いや、本気でそのように思いこんでおられる向きが意外に多いのかもしれない。どうもそんな気がします。

それはすなわち、自分は子どもと別ものだ、という「秘められた信念」とでも呼ぶべきものです。自分は子どもと同じでない。

ここまでではまぎれもなくその通り。問題はその先、違いをどのようなものにとらえるか、まさにこの点にあります。ここでのポイントは、それを非連続な本質においてとらえるか、それとも連続的な本質とともにとらえるか、の選択にかかっているといえそうです。端的にいえば、子どもの遊びを考えると、自分たち大人の遊びをどれだけ意識し、どのように位置づけているか、そして更にはどのように実践しているか、ということとです。それとこれとは異質のもの、と決めつける進歩的遊び論はこの辺で根本から洗い直しが必要なのではなからうか、とオボロゲながら思うのです。

(三重大学)

五月のうた

どういうわけか一番最初に頭に浮かぶのは小学校唱歌の「鯉のぼり」、

「いいらあーあのなあみいと」

と歌いながら、何の意味かちっともわからなかったし、二番の

「たちばあーなかおーる」

というのは宝塚のスターの名前かと思ったりした小学生の私だった。

でも、成長して幼稚園の先生という、あこがれの職業については、五月になると、やはり幼稚園唱歌の「こいのぼり」や「せいくらべ」の歌を子どもたちと一緒に歌った。

そしていつのまにか結婚して、子どもが小学校に入学して、PTAのコーラス部というのに入って、五月の歌として教えていた。だいたいは「おお、牧場はみどり」だった。

青春時代を戦争、戦争の中にごした私にとって、ふたたび青春をとり戻したかのような、さわやかな歌に思えて、声をはり上げて歌ったことも今はなつかしい。

(赤間峰子)